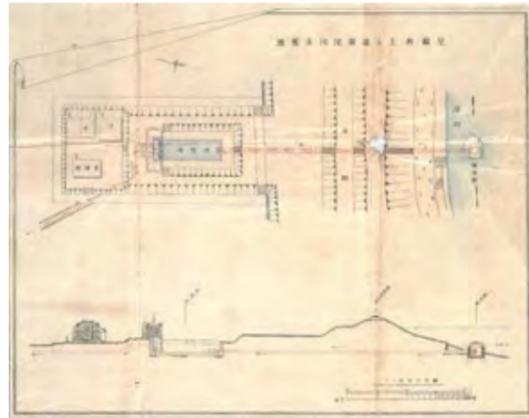


柴島取水場(淀川)から神崎浄水場までの導水管(水道管)



あたりの断水時間は最長18時間にまで及びました。水源である藻川は枯渇し、神崎川の水量が減少したため、年々進行していた逆潮が二挙に進み、干潮限界は取水地点の上流4kmにまで達したのです。工場からの排水は逆潮により川に停滞し、河川の水質は急激に悪化しました。浄水処理した水道水でも塩分を含み、臭いを発するなど、水道水とは言い難い状態となりました。

この影響で操業を一時中止する工場も相次ぎ、市民の生活だけでなく産業にも大きな打撃となりました。

尼崎百年の大計 いざ、淀川へ①



水道水を作るための淀川からの水が、今のJR東海道線の線路の下を流れてきているかと思うと、信じられないよ。それは、すごい大工事だったんだろうな。でも、それ以来、兵庫県でも淀川の水を使って水道水をつくることができていることを考えると、まさに最初に始めた尼崎って本当にすごいよね。



大正8年(1919)~ ひっ迫する水の需給状況。 さらに、異常渇水と逆潮で大ピンチに。

水道創設時の給水戸数は、総戸数7313戸に対して2353戸で普及率は32%程度でした。一方で尼崎市は工業都市としてさらに発展が続き、大正5年(1916)からの3年間で、工場数は52から82に、職工数は7275人から1万80人に急増しました。

水道の給水量は工業用水が50%以上を占め、通水から1年も経たない大正8年(1919)夏には、当初計画していた量の2倍の給水量を記録し、水の需給状況はすぐにひっ迫しました。

さらに追い打ちをかけるように、大正11年(1922)から13年(1924)にかけて異常渇水が発生しました。断水は3年間で104日、断水時間は延べ1572時間、1日





5



2



3



4

1: 取水栓工事 2: 完成した柴島水源(現柴島取水場)
3,4: 第1期拡張事業竣工式(昭和3年4月) 5: 尼崎市役所(昭和13年頃)

尼崎百年の大計 いざ、淀川へ②



神崎川水管橋築造工事

Q 淀川への水源変更は、何が画期的 だったの?

A 当時、県外から取水することはとても異例のことで、交渉は困難を極めました。工事も27インチ(約68cm)管という大口径管を約8km、神崎川を越えて布設するという、誰も経験したことがないものでした。そうした困難を乗り越えて淀川水利の端緒を開いたことは、とても画期的でした。



阪神上水道市町村組合 (現・阪神水道企業団)の設立

昭和初期の阪神間他都市においても尼崎市が抱えていたのと同様の公衆衛生面や保安上の課題を抱えていました。その解決に向けて、兵庫県は「阪神間の自治体が個々に水源開発をすることは難しく、一体的に取り組むことが必要」という見解を示しました。

それを受け、昭和11年(1936)に16市町村からなる阪神上水道市町村組合が設立され、淀川を水源として工事を進め、昭和17年(1942)に尼崎の久々知に浄水場が完成し、受水を開始しました。これにより、尼崎市は安定的に給水できるようになりました。



淀川水利の端緒を開いた 画期的な大工事に挑戦しました。



1

水需要の増加に加え濁水や水質汚染により、創設時の水源である藻川及び神崎川から取水を継続することは不可能となってきました。そのため、応急的な施設の増設ではなく、抜本的な水源変更が必要で、その調査を開始しました。猪名川、武庫川なども候補にありましたが、将来的な水需要を考え安定した水源として淀川から取水すべきという方針を決定しました。

他府県に属する淀川に水源を求めるという大事業であったため、大正13年(1924)に市議会にて「上水道拡張調査委員会」を設置し、計画を策定しました(第1期拡張事業)。

淀川の柴島から神崎浄水場へ水を引くためには、大口径管を約8kmにわたって布設しなければなりません。この間には河川(神崎川)を越える、水管橋をかけるといったこれまで経験したことがないような大工事を行う必要がありました。

一方で、市の水事情は1日の猶予も許さない状況下にあつたので、作業は昼夜間わす行われ続けました。不眠不休の工事を続けるという努力の結果、予定工期からわずか10日遅れの昭和3年(1928)4月10日に完成しました。

この事業は、淀川水利の端

戦災を乗り越えて①



4



3



5



焼け野原となった杭瀬商店街付近

昭和11年(1936)～

**度重なる空襲で大きな被害を受けた尼崎のまち。
水道も導水管の被害で
一時給水できない状況になりました。**



1



2

- 1: 暖速ろ過池築造工事
- 2: 焼け野原となった杭瀬築 (尼崎市教育委員会所蔵)
- 3: 暖速ろ過池砂入工事
- 4: 薬品混和池築造工事
- 5: 浄水場内工事風景



金楽寺をはじめ、各所に大きな被害がありました。
水道設備では、神崎浄水場は倉庫1棟の消失と、その他若干の被害で留まりましたが、淀川からの導水管が被害を受けたため、給水できない状況になりました。そこで阪神上水道市町村組合の導水管と連絡し、受水することによって市内への給水を行いました。

第一次世界大戦後の不況と金融恐慌から立ち直り、軍需産業を先頭に景気が上昇し、これに伴う地域の拡大と人口増加に対応するため、昭和11年から14年(1939)にかけて第2期拡張事業として、神崎浄水場と柴島取水場の施設を増強しました。
昭和12年(1937)に始まる日中戦争から昭和16年(1941)開戦の太平洋戦争へと時代が進む中で、尼崎の工業生産は軍需が中心となり、市民生活も戦時体制へと組み込まれていきました。尼崎市は昭和20年(1945)3月13日夜に最初の空襲を受け、以後7回にわたり空襲を受けました。特に6月1日と15日の空襲では、西長洲・杭瀬・今福・神田中道・城内・



知らせするとともに、昭和29年には「水が漏れたらすぐに来てほしい」という市民の要望にこたえるために専用の車両を購入し市民サービスの向上を図りました。

以後、営業所や水道取次所の開設など水道の普及に向けたサービスの向上を推進しました。

設備・施設の増強に加え、市民サービスの充実にも努めました。

戦後復興で市民生活が徐々に立ち直るなか、昭和22年（1947）に園田村が尼崎市に合併し、現在の尼崎市域となりました。この合併により新たな水源地として、園田水源地が加わるようになりました。

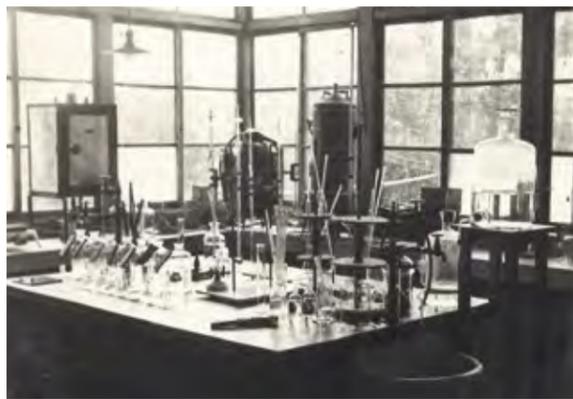
経済の急激な復興と合併による給水地域の拡大により、水需要は年ごとに高まってきました。そのための増補改良工事として、神崎浄水場の施設の増設で浄水能力を強化するとともに、新しく急速ろ過池を導入しました。

戦災を乗り越えて②



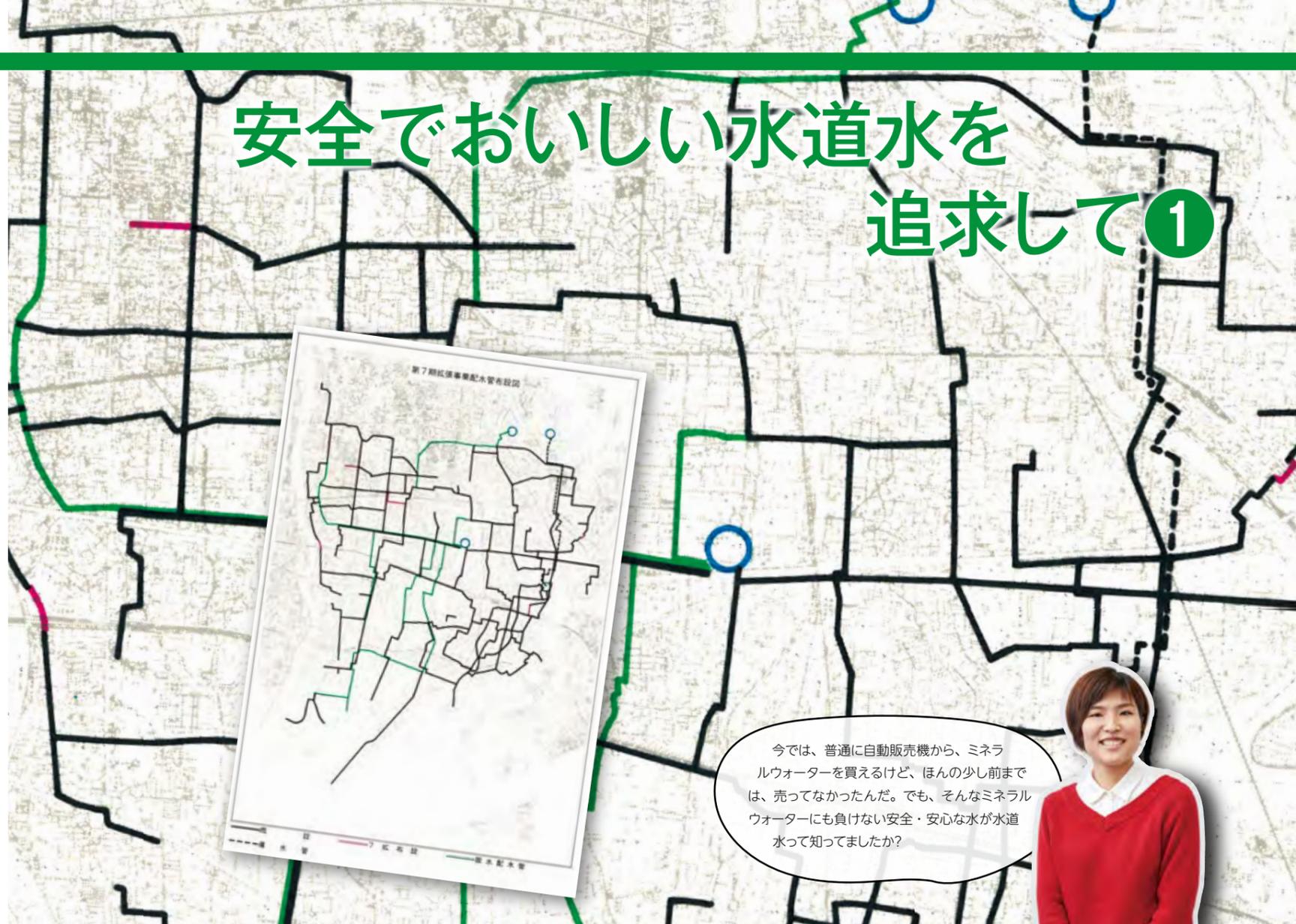
へえ、これが神崎浄水場の60年ほど前の写真なんだって。今は全く様変わりしていて、残っている施設はほとんどないね。建て替えや増築しないと追いつかないぐらいに、急速に水の需要が高まってたんだね。





な取り組みも行いました。さらに、琵琶湖でカビ臭物質が発生するという事態が加わります。最初にカビ臭物質が発生したのは昭和44年(1969)でした。その年の6月に発生したカビ臭物質は淀川下流までその影響を及ぼすことはなかったのですが、翌年6月に発生した際は、神崎浄水場に到着した淀川の水から異臭が感じられました。直ちに活性炭の投入など対策を講じましたが、当時の設備では、臭気を完全に除去することはできませんでした。

安全でおいしい水道水を追求して①



今では、普通に自動販売機から、ミネラルウォーターを買うけど、ほんの少し前までは、売ってなかったんだ。でも、そんなミネラルウォーターにも負けない安全・安心な水が水道水って知ってましたか？

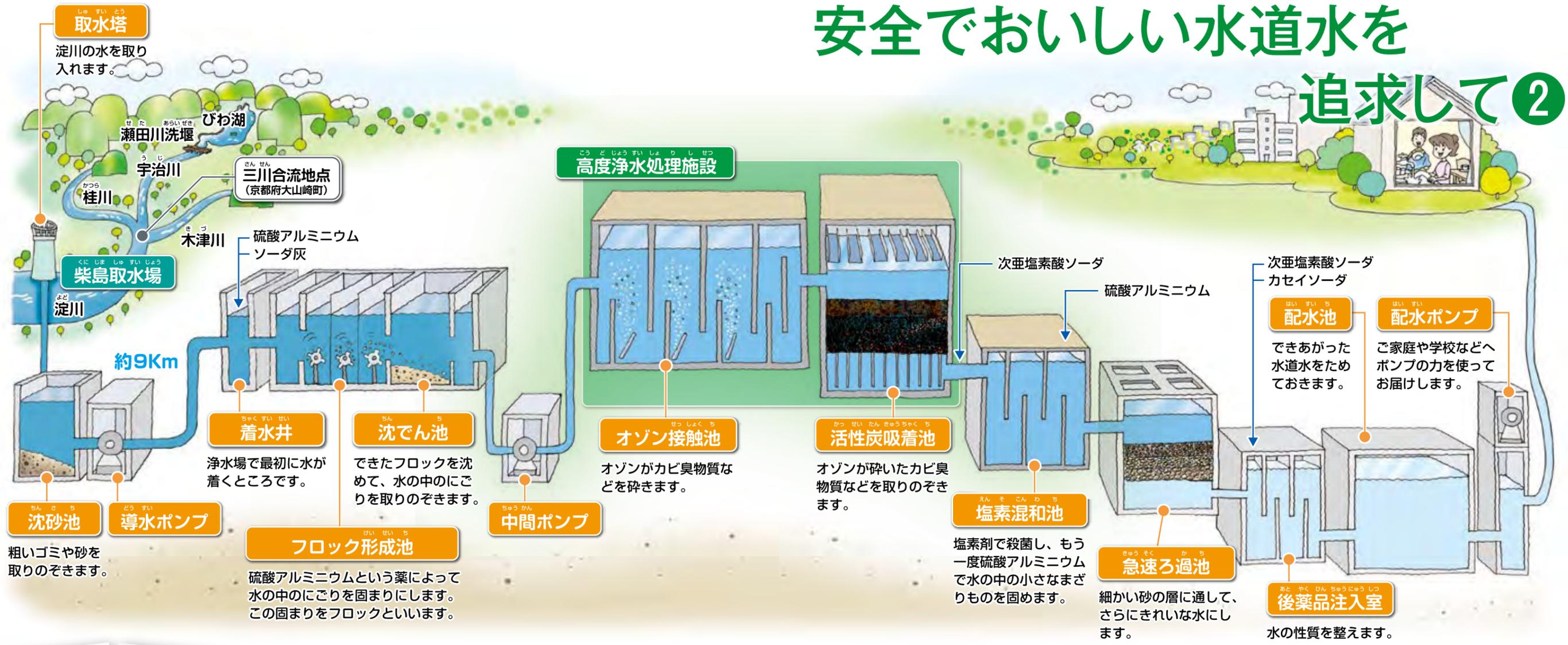


昭和30年(1955)～ 淀川の水質悪化に加え 琵琶湖でカビ臭物質が発生。

淀川の水質は、取水開始からしばらくは浄水処理に問題となるような汚染などなく推移していました。しかし、昭和30年ごろから淀川流域の工業の発展と人口増加に伴って水質汚染が急速に進み水質異常による事故が年々増加傾向にあったため、尼崎市では水質試験車を導入し、まちなかでも車内で水質を分析できるよう



安全でおいしい水道水を追求して②



水道GLP認定証

Q 神崎浄水場を出た後の水道水の水質検査はやってないの？

A 浄水場から送り出された水道水が安全であることを確認するために、自動水質計器で常時監視するとともに、市内16か所の地点で定期的に採水し水質検査をしています。

日本初のオゾン処理施設をはじめ最新鋭の技術で水質管理に取り組んでいます。

琵琶湖のカビ臭物質の発生は、植物性プランクトンの異常繁殖が原因で水質は早期に改善されないことが予測されたことから、カビ臭の発生については長期化・多発化する可能性が考えられました。

水道局ではカビ臭物質への恒久的な対策を講じるために、昭和45年(1970)からメーカーの協力を得てオゾンによる臭気除去の実験を開始し、昭和48年(1973)に日本初のオゾン処理施設が完成しました。全国に先駆けて誕生したこの施設は、非常に画期的で、昭和60年(1985)に厚生省(現・厚生労働省)が企画、日本水道新聞社主催で選定した「近代水道百選」に選ばれています。

下水道施設の整備の進展や

